沈黙では表現できない ～多国籍国家からみる私～

久留米信愛高等学校 2年 妻夫木 碧

エメラルドグリーンの瞳、燃えるような赤髪、耳で輝く多くのピアス。

留学生としてオーストラリアへ行き、現地の高校に通った初日、まず驚いたのは生徒たちの見た目の違いでした。オーストラリアは移民を長い間受け入れてきたという歴史があり、さまざまな人種の生徒たちが一つの学校に集まっています。校内を見るだけでも、個性があふれているように感じます。そして、学校には見た目に関する校則がほとんどありませんでした。

授業も日本とは全く異なり、理系の教科以外は自主学習やグループ活動が中心で、話し合いではお互いの意見と質問の繰り返しです。私は日本語を教える立場として授業に参加してほしいと先生から言われたので、オーストラリアでも日本語の授業をとっていました。グループで日本食の紹介動画を作るというのが今回の課題でした。

私は最初、自分が日本人だからという理由で、私がさまざまな日本食の提案をしなければならないという責任感を持っていました。なぜなら、話し合いがスムーズに進まなくなるのではないかと思ったからです。

しかし、それはこの国では不要なのだと後から気づかされます。私が話す前に「肉うどんを作ってみたい」や「親子丼もいいね」などとすぐにたくさんの案が挙がりました。そして、次に一人ずつその意見についてどう思っているのかを聞かれます。否定なら否定、賛成なら賛成でその場で言葉に出すためそれぞれの意思を把握した状態で話し合いを進めることができます。一人の意見にみんなが合わせるのではなく、少しずつみんなで一つの意見を作り上げていく話し合いです。

授業では、分からないところや疑問などをその場で聞くため、あとで質問しに行くという行動はあまりしません。成績は課題で主に決まり、日本の定期考査のようなものはなく、生徒の日頃の努力やそれぞれの能力が評価されています。

日本の学校はオーストラリアと比べると外国籍の生徒が少なく、国際色が薄い傾向にあります。そのうえ、校則が細かく定められている学校も多くあります。その結果、どうしても見た目は単一的になってしまっています。それが学校全体に統一感を持たせ、逆に、集団としての良さも引き出しますが、個性を表現しにくい原因の一つになっているのかもしれません。

私達は個性よりも調和を重視していると思います。相手の気持ちを察し、意見を合わせることで、物事をスムーズに進めることができるからです。その結果、私達は「空気を読む」という選択が習慣になっています。人に同調する間として、沈黙の時間が生まれてしまっていました。日本ではこのような感覚が生活に根付いています。「空気を読む」ことは言葉にしない配慮という、少し変わった優しさの形です。

しかし、現代では、空気を読むことで生まれていた沈黙の時間が優しさからではなく、周囲の目が気になるという理由に変化してきているのではないかと思います。実際に、私のクラスでも、文化祭の出し物を決めるとき、案を出すのにも時間をとってしまいます。案がないわけでは決してありません。ただ言葉に出すと、自分の考えを人に知られ、自分に注目が集まってしまいます。目立つのを避けるため、または相手との対立を避けるために言葉に出すことをためらってしまうのです。「空気を読む」という優しさから始まった間が、周囲の目を気にするという沈黙の時間になり、自分の考えが集団にうもれてしまうのです。

今は多様性の時代です。自分らしさが多くの人に認められる時代になりました。しかし、日本人には自分らしさを発揮すること自体をためらっている人が多くいるのが現状です。

私は、自身の意見をきちんと伝える場に大きな意味があると、留学経験から実感しました。考えを共有し、さらに最適な方法を見つける、これは私たちの成長につながります。私達が学校に行っている目的は勉学のためだけではなく、他者と交流するためでもあります。そのときに大事なのは、黙って相手の意見にただうなずくことよりも、積極的に自分の思いや意見を発信することです。それが、相手に新たな視点や気づきを与える刺激になるのだと思います。

たしかに、日本は個性を発揮しにくい環境にあるかもしれません。しかし、一人ひとりが自分の思いや考えを言葉に出すことで、互いの個性や世界観を共有し続ける真の多様性社会となっていくのではないでしょうか。